

福沢の『開口笑話』における 教授法およびステレオタイプ表象

ロン スチュワート

1. はじめに

福沢諭吉と彼の長男、一太郎は 1892 年に発行した『開口笑話』という英和対訳ジョーク集において、ユーモアを教育手段の一つとして紹介した。福沢諭吉の序文によると、

「教育の目的は唯才徳の発達を促すに外ならざれども其方法は千差万別際限ある可らず就中奇言を放て人の好奇心に投じ一笑の間に無限の意を寓して自ら人情世態の裡面を会心せしむるが如きは教育法の捷徑にして却って有力なるものある如し」¹

とある。ここに鼓吹されている授業法、変わったことを発言することが人生および社会における理解への早道となることは西洋で現在流通している授業法の一つ「アンコリング」("anchoring" 学生にあることを理解させ頭に強くインプットさせるために異常なことをやったり言ったりすること、あるいは体験させること) と似ている。それだけではなく、以下のような記述もみられる。

「書中片々の笑話その文短くして意味長く其言奇にして却って奇ならず能く之を玩味せんには人生の居家処世に益すること決して少なからず豈唯長日を消する一局の碁ならんや」

要するにこの本に載っているジョークは短い、意味深い。単なる長い日々の時間をつぶす遊びではなくこのジョークを使うセンスを覚えたら日常生活における気転が良くなると福沢が主張している。また序文によると、次のように述べている。

「東西風俗の殊ならよりして本邦人に解し難きものには得に二三の緒言を添えて読者の便に供することに為さしめたり」

つまり、この本に掲載されているアメリカからのジョークの中にある、東洋と

西洋の習慣および文化の差異による理解しにくいものに短い解説を加えることにした、とある。ここにはジョークおよび緒言（解説）に西洋が表象されていることが示唆されている。

本論では、この教育手段としてのユーモアをより広い教育目的とする英和ジョークの文脈の中に位置付ける。また、『開口笑話』においての「西洋」社会像はどの形で伝えられていたのかを試るために本の中のエスニックジョークを取上げ、そのジョークに必ず登場する人種および民族のステレオタイプ表象は翻訳（あるいは翻案）でどのように変化するのかを考察し、その意味を論じる。これらの問題に入る前に『開口笑話』における先行研究、またこの本の背景と構造を紹介する。

2. 先行研究

『開口笑話』を読みなおそうとする研究者は四人しか見出すことが出来ない。その一人、飯沢匡は、『開口笑話』の重要性を論じようとし、福沢諭吉の無視されたユーモア精神および、このテキストと福沢の「脱亞入欧」論との関係、そして、福沢の武士道と儒教の否定などをテキストの中で考察した（飯沢、1977、1984、1986）。もう一人、マーガレット・ウェルズは日本文学史におけるユーモアの位置をめぐる研究を出し、福沢諭吉の「奇言」（普通には思いもつかない奇抜な言葉）が教育の早道だという主張が、西洋教育に大きな影響を与えていたデボノ（Edward de Bono）のその主張と似ており、福沢はデボノの「水平思想の学習」より 80 年早いことを指摘した。だがさらに、それにも拘わらず、その主張が江戸時代の戯作の前書きにも似ていることも指摘した（Wells 57-8）。三人目の研究者、長島平洋は、福沢諭吉が『開口笑話』にて発表した笑いによる教育法は 1910 年から 1940 年まで使われた国定教科書の国語読本の中の「一口ばなし」によって実現されたのではないかと論じた（長島 21-32）。最後の研究者はハワード・ヒベットである。ヒベットの本、日本ユーモアの文化史『菊と魚』によると、福沢諭吉は江戸のユーモアは下品だと考えていたが、『開口笑話』に載っているジョークは比較的気品のあるものである。西洋の文芸を賛美しようとしなかった福沢がこのジョークの教育的価値および西洋を理解する為の価値を主張したことも指摘した（Hibbett 168-9）。

しかし、『開口笑話』を教育目的としている英和ジョークの系譜に位置しようとした研究、またはこの本の翻訳あるいはステレオタイプ表象を分析しよう

した研究は見当たらない。

3. 成り立ち

この原本の表紙には『英和対訳「開口笑話」全一冊 *Pleasantries Done From English to Japanese*』という日本語と英語の題名、そして「福沢諭吉閱、男一太郎翻訳、明治廿五年九月出版」と掲載されている。つまり、この1892年に出版された本は福沢諭吉(1835-1901)と彼の長男、一太郎(1863-1938)の共著であると言える。諭吉は「開口笑話序」という序文を書き、内容を校閲していた。一太郎は英文の翻訳と編集をし、さらに4ヶ所に緒言(解説)を書いた。一太郎は「欧米各国を歴遊し、帰来巖君の創立になる、時事新聞社に入り専ら力を其発展に尽瘁す」(明治人名辞典)。本に載った351編の英和対訳 *Pleasantries* (滑稽談)は一太郎が『時事新報』の為に翻訳したものから纏められた。² その中に若干の早口言葉や当意即妙の言葉(witticisms)があるが、本に載った短い英和対訳の大半はジョークである。³ ジョークのジャンルは様々で、その中には、現在も使われているジョーク、*Irish jokes* (アイルランド人が対象となっているジョーク) や *mother-in-law jokes* (姑が対象となっているジョーク) そして、女性差別、人種差別等を扱うような現在では陳腐なものとなったジョークも入っている。

『時事新報』は福沢諭吉が1882年に創刊した新聞で、明治時代の新聞メディアの代表的な存在の一つである。幕末・明治初期の新聞は殆ど各々の政党の(思想を強く反映している)機関紙で、インテリ向けであった。さらに「愚民」を教育しようとする意図のものもあった。発行部数は少なかった(数百から数千部)。1880年代に入って、『時事新報』を始めとして、イギリスの『タイムズ』に類似している「不偏不党」の立場を目指した新聞が現れた。1890年代に日本の新聞はアメリカの新聞をモデルとし、新聞社の規模は拡大し、娯楽としてより多くの人に読まれるようになった。発行部数は激的に増加し、20世紀に入ると七つの新聞社の新聞発行部数は十万部を上回っていた(de Lange)。『時事新報』も同じ方向へと動き、明治時代が終わるまで、連載小説、スポーツ欄、レシピ、イラスト、政治漫画や日曜日のカラー漫画付録として「時事漫画」等を導入していた。そしてその中に英和対訳ジョークもあった。

1885年5月9日号の『時事新報』において、初めて滑稽談が掲載され、当初、日本語訳は付けられていなかった。その第一回目の文では英語の諺で、その後殆ど毎日、面白い英文の諺、当意即妙の言葉、あるいはジョーク等が紹介され

ていた。同年7月10日号から和訳が付けられるようになり、毎回、一つの諺や一つのジョークを紹介する掲載の形式が定着した。長島平洋によると、当時のジョーク欄は見出しも何も無い、埋め草のような存在で、掲載日の決まりもなさそうであると語っている（長島19）。⁴しかし、当時、連載コラムに見出しを付けないことは普通である。それより『時事新報』はむしろ、この欄を売り物にしてきたのではないかと思う。なぜなら、始まった年の翌年2月9日号からこの欄は毎日、第一面の下部に掲載され、見出しは無いが、横文字で相当に目立っているからである。⁵

この英和対訳ジョーク欄に掲載されたジョークの大半の出典は示されていない。しかし、この欄が始まってから一年の間に掲載されたジョークのみを対象とし、それらの出所を調べてみたところ、引用されている雑誌・新聞は60種類を上回る。『開口笑話』の面白い短い英文やジョークは63種類の雑誌や新聞から抜萃されていた。⁶『時事新報』で引用された新聞・雑誌の大半はアメリカの東部（シカゴを含む）のものである。東部の新聞、*New York Herald*、*Times*、*Boston Courier*、*Philadelphia Record*、*Washington Star* など、または生活、主婦 や少年雑誌、*Youths Companion*、*Harper's Bazaar* など、そして当時人気のあったニューヨークのユーモア雑誌、*Judge* や *Life*、*Puck* からの引用が多く見られる。

4. 教育手段としての英和対訳ジョーク系譜

この第四節では『開口笑話』と他の英和対訳ジョーク、新聞雑誌の蘭およびジョーク集が出された理由を考察しながら、『開口笑話』を、明治初期から現在までの教育手段としての英和対訳ジョークの系譜に位置付ける。この系譜は網羅的ではなく、教育手段としての英和対訳ジョークの出発点、明治時代と現在の目的の連続性を見せるため、例数の少ない大正および昭和初期を省いた簡単な系譜である。しかし、その前に『開口笑話』の教育目的をもう一度確認しよう。

4.1 教育目的

福沢諭吉の序文から分かるように、この本が出版される目的は、読者がユーモアを通してより広い世界を悟ること、ユーモア感を身に付けることにより読者が自分の人生を改善することである。『開口笑話』が発行された際、『時事新報』1892年10月18号にこの本の広告が載り、その本は次のように宣伝されていた。

右は時事新報紙上に掲載発兌したる短英語中その最も絶妙なるものを抜萃し便覧の為め集めて一冊に再版したるもの此書を一讀すれば人事無限の機轉に益するにと大なるのみならず英和の対訳文は以て英語を學ぶの一助として其効少なからざるべし

この出版社の宣伝文に書かれた目標は、福沢諭吉が序文に書いた目標と似ているが、英語の勉強になる面も強調されている。しかしいずれにせよ、教育あるいは教育法としてのユーモアが出版された理由の一つとなっている。

4.2 明治から現在までの系譜

日本におけるジョーク集の歴史はかなり長い。17世紀の始めから、例えば安楽庵策伝の『醒睡笑』(1628年)等、江戸時代において数多くのジョーク集が出版され、18世紀はジョーク集の黄金時代になった(Hibbett 18-22)。このようなユーモラスな戯作の前書きにその本の教育価値を唱えるところもあった(Wells 58)。18世紀に外国のものも翻訳され、平賀源内が訳した中国のジョーク集『笑府』はその一つである。18世紀の半ばまで幕府の漢学を通して儒教を助長する熱心さでジョーク集まで訳され、そして、漢文を教える為に日本のジョークも中国語に訳された(Hibbett 25-26)。しかし、西洋、とりわけ英和对訳の形で教育を目的にしたものは明治時代からであろう。

英和对訳ジョークは『開口笑話』および『時事新報』が現れる前にもあり、そして現在もある。これらはいまでもなく、読者を楽ませる為や、お金を設ける為に出版されている。しかし、それだけではなく、多くの場合、そのジョークを掲載するあるいはジョーク集を発行する理由として「教育」が出版社、編集者、あるいは著者によって挙げられている。

『团团珍聞』というユーモア雑誌は1877年に出版された創刊号から「英和对訳 *ANGLO-JAPANESE TRANSLATIONS*」欄を発表しはじめた。後にこの欄は専ら対訳ジョーク欄となっていくた。『团团珍聞』編集側によるとこの欄は全く新しいことであり、第一回目の対訳欄の会話の中に次の文が伺える。

日本新聞ノ中ニ英和ノ譯文ヲ箱入タレハ是迄出来タ新聞ヨリ全デ新工夫デアリマス
そして、同じ会話の中で、この欄の重要性が宣伝されていた。

[甲] アリマスヨ^{ヨドモ}児輩デモ^{ヨメ}讀テ^{ワカ}了解ル様ニ^{カナ}假名ガ^ソ夫レニ^ツ附ケテアリ又

其上ニ和英會話ノ部ガアリテ英学スル日本人モ日本語ヲ習フ外国人ニ
モ^{キツト}度益ニ成リマス

- [乙] 左様僕モ至極御同論テ英語ノ通訳ヲ正シク學ビ度ト望ンテル全国ノ
學生ガ甚^{ハナハ}ダ称用シマスダラウシテ其和英ノ會話ニハドシナ事カ有升
[甲] 其事件ハ色々テ内外国政務上ノ事蹟ニ付鳥渡議論スルモアリ面白イ
小説類ヤ又タ隱話ヤ諧^ナ謔^ゾヲ付ル積リナリ
[乙] 夫デモ此ノ新聞ハ^{キツト}度大小ノ^{ガクコウ}学校生徒ガ^{セイト}重宝シマスダラウ

要するに、訳を付けた内外政治ニュース、短編小説、謎なぞや滑稽話（ジョーク）を読むのは、小学生から大人までの日本人だけでなく、外国人にとってもためになり、「正しい」英語、日本語及び政治事情を学ぶことができると言っている。明らかに教育が目的のひとつである。

明治後期に発行された英和ジョーク集も教育を一つの目的としていた。日露戦争ごろから約8年間に渡って、メディアの拡大の中、ユーモア雑誌ブームがあった。当時、15種類以上のユーモア雑誌が現れ、その中にはジョークが掲載されていた雑誌もあった。1905年から1912年まで発行されていた『東京パック』という雑誌は殆ど毎号、英語や日本の（対訳が付いていない）ジョークを広告に挟んで掲載していた。時には「パック珍談」や「字ポンチ」という英和対訳ジョーク欄も載っていた。1906年に登場したユーモア雑誌『上等ポンチ』には対訳ジョーク欄、「Storyettes おどけ噺（訳文）」もあった。さらに、同年12月15日号に国木田哲夫編『英和対訳「米國一口噺」』（独歩社）という本の広告が見える。⁷その広告にこの本は次のように宣伝された。

世界第一の滑稽好きなる米国人最近の一口噺を英和対譯したる袖珍美本なり
譯語頼る穩當、英文研究尚お米國風の滑稽諷刺の妙を味ひ得ると同時に
語学を習得し得べし

つまり、このジョーク集の場合も、読者をアメリカ人のユーモア・センスで楽しませると同時に読者に英語を教える為に出版されていた。

近年になっても対訳ジョークは現れつづけている。例えば、開高健の『食卓は笑う』（1982）である。開高は幾つかのジョークを紹介しているが、そのなかには内に七つの英和対訳ジョークもある。開高にとってユーモアは国際交流の為に重要なものであった（開高12）。本の中の英訳ジョークは「外人向けで、あ

なたはその英訳を棒暗記してブチカマシたらよろし。契約成立。国家安泰。疑いなし。」と開高は言っている（開高 13）。開高はこのジョーク集により、飯沢がいう「日本人のジョークに対する無理解」（飯沢 1977: 196）を直そうとする。つまり、ある種の教育を目的としている。

また、近年、英和対訳ジョーク集がかなり盛んである。次の 2 冊とそれらの宣伝文はインターネット（www.amazon.co.jp）で見ることができるが、両者の最も大きな教育目標はアメリカ文化や社会の理解である。

鈴木 進『アメリカン・ユーモア-英語にみるジョークと文化』（丸善 1993）
本書では、英語を通してアメリカン・ユーモアの面白さを伝えると同時に、その背後にひそむ文化的価値基準、信念、対人観などを理解する手掛りを提供する。

生田 哲『ジョークで知るアメリカの暮らし』（アルク 1998）
アメリカン・ジョークを理解できれば、現地の暮らしや文化がよくわかる。長きにわたる滞米経験をもつ著者が、自らの生活体験をもとに語る、アメリカ文化の生きた教科書。

他の本は、題名や帯に書いてある宣伝文から分かるように英語能力の上達を目標としている。例えば、岩間直文『すぐに使える英語ジョーク 150』（丸善 2003）、酒井一郎『英語はジョークで身につける』（河出書房新社 2004）、「英語力が、かなりつきます」と帯にかいてある里中哲彦の『一日一分半の英語ジョーク』（宝島社 2004）、「英語を学べる！笑える！ジョークを身につく！まさに一石三鳥の英語楽習本」と帯に書いてある森宗貴の『アメリカン・ジョークに習え！』（アルファポリス 2002）などがある。

しかし、これらの最近の本、開高健および岩間直文、森宗貴などの本は、ジョークを英語能力の上達方法、およびコミュニケーションの潤滑油として（ある意味では人生の改善方法として）進めながら、授業法としては、福沢とは異なり、丸暗記を促進している。

4.3 『開口笑話』の系譜における位置

このように、教育法としての英和対訳ジョークの場合は、『開口笑話』を、上に挙げたような 1877 年から現在いたるまでの系譜の初期に位置付けることができる。それは一番最初の英和対訳ジョークではないが、恐らく一冊の本として最も早く出版されたものである。上の例の二つの大きな共通点は外国理解(特

にアメリカ) および英語の勉強が目的であるということである。確かに福沢諭吉のユーモアの勧めはそれだけではなく、人生の改善や「人情世態の見えない所を悟らせる教育法のショートカットとして有効である」(長島 20) と主張している。ウエルズが言うように、福沢は、現在でも暗記に大きく依存するきらいがある多くの日本教育者と相違し、日本文部科学省の 1998 年以降の教育方針に調和する暗記以上の理解方法を提供しようとしていたのではないか。

尚、『開口笑話』は明治日本における変化しつつある認識を示唆しているようである。明治時代の文明開化が広く求めていたのは修業、つまり、個人的な目標より広い社会あるいは我が国の目的を果たす為に、訓練、実用的な教育、自己犠牲的な奉仕への傾倒である。その一方、大正時代に入ると、文明開化より文化(あるいは文化主義)という表現の方がよく使われるようになり、この変化とともに、「修業」の代わりに「教養」が求められるようになった。「教養」はドイツ語の *allgemeine Bildung* という概念とほぼ同じ意味で使われていた。換言すれば、個人的な修業および洗練が望まれてきた (Harootunian 15)。この変化は日露戦争後に起ったと考えられている。しかし、諭吉の序文は、「團々珍聞」の英和对訳文の実用的な面(「為ニ成リマス」)だけの宣伝と異なり、実用的な面、「人生の居家処世に益すること」を強調しながらも、読者がジョークを「玩味」できるようになること、つまり、読者が教養を身につけることも目標の一つとしている。

5. 『開口笑話』におけるエスニックジョークとステレオタイプ表象

上述したように、福沢諭吉の序文には、ジョークに西洋の風俗が表象されていると示唆されている。しかし、この本に掲載された数多くのジョークでは、原文の英語ジョークの細かいところが訳出されず、結局、翻訳というより、むしろ翻案とよんだ方がいいものが多い。それに、一太郎による緒言が少なく、本のセールスマンおよび西洋諸国の機械で動く社会、宗教的習慣、求愛習慣、英語の早口言葉という面にしか言及せず、その中に白人プロテスタントの上層中産階級の社会がかなり一般化され、社会の人種および民族、宗教的な多様性がなくなってしまった。

1890 年ごろから 1910 年ごろまでは、アメリカのボードビルおよびバーレスク劇場におけるエスニックユーモアが一番明白な時代であった (Mintz 19)。アメリカの 19 世紀の新聞もエスニックユーモアに溢れている (Lowe 446)。『開

口笑話』に引用されている 1880 年代から 1900 にかけて人気を博したニューヨークユーモア雑誌 *Puck* や *Judge* は黒人、アイルランド人、ユダヤ人などを笑う漫画やジョークで知られている (Lowe 446、Fischer 70-1、Perry 58-67)。当然、『開口笑話』にもエスニックジョークが表れている。

5.1 エスニックジョークとは?

エスニックジョークとはある人種 (例えば黒人) あるいは民族集団 (例えばユダヤ人)、国民 (例えば、ベルギー人) の成員のステレオタイプ化された行動、習慣、性格または他の特徴を笑いの対象にするジョークの相称である。言語学者ラスキンによると多くの場合、「ネタにされるのは、不潔さ、大食、過剰性欲、愚鈍、吝嗇といった、ある特定の民族の行動特徴や価値観と目されるもののなかでも「ネガティブ」な側面である」(ディビスと安部 23-4)。普段、ある集団は言語的、文化的、地理的、あるいは経済的に近い周辺に存在する他の集団に対し、自分の集団では道徳的に許されない行動をステレオタイプ像として決めつける (Davies 383-4)。

19 世紀末のアメリカの新聞雑誌によく表れたこのようなネガティブなステレオタイプ表象は、当時の主流の民族集団にとっての少数民族の抑圧を正当化し主流のヘゲモニーを強化すると考えている研究者が多い (例えば、諷刺画研究家、Appel、Fischer、Curtis、フックス)。研究者ボスキンはエスニックユーモアとジョークは人間が使うもつとも意地悪な武器だと考え、また他者に対する意地悪かつ敵愾心といった否定的な感情を許し、直接あるいは間接的な抑圧を正当化すると主張している (Mintz 24)。近年、特に移民の多い多元文化主義政策を取った国は、エスニックジョークを人種差別として警戒しており、1987 年にあるニュージャージーの都市はこのような表現を法律で禁止し、2002 年にあるイギリスの保守党の政治家は講演でエスニックジョークを言ったため批判を浴びせられて離党させられた。⁸

他の学者はエスニックジョークのより肯定的な面を取上げている。彼らは、エスニックジョークについて、必ずしも攻撃心や敵愾心を示すものではなく、社会における摩擦に対して安全弁の役をする可能性、またよりよい関係を築く手段として使える可能性を指摘している (ディビスと安部 11、30-3、206 ; Mintz 24)。例えば、ユダヤ人の自嘲的ジョークは同時に自賛的であり、知的敏感さを示しており、このようなジョークはアイデンティティを問い直し、独自の民族

アイデンティティを維持しながら、多民族とのあいだに境界を作る（デイビズ安部 160、196）。また、ある民族集団に対するステレオタイプ表象を助長する可能性があるにも関わらず、そのジョークの的になった民族集団の成員は、同じジョークを使うことにより、そこに込めているステレオタイプを非現実的なものとして、ステレオタイプ自体を攻撃する（Leveen 40）。

エスニックジョークはネガティブなのか、ポジティブなのか、それとも両方なのかについては意見が分かれている。しかしながら、近年の多くの研究者は一つの点において賛成している。それはエスニックジョークという行動は、自己民族集団と他民族集団のあいだの不安を感じさせる曖昧さをなくし、境界を作ろうとするという行動であり、このジョークを使っている人々の自己アイデンティティ形成に重要な役割を果たしているということである（Lowe 441、Davies 383、Leveen 29）。歴史的なコンテキストおよび場所、話し手と聞き手の関係によっては、ジョークの意味が随分変わってくる（Leveen 33-4）。例えば、白人が作った黒人をバカにするジョークは、黒人が使うと、黒人に対する白人の態度を諷刺する意味を持つようになる（Leveen 5、32-3）。

さて、アメリカ国内の民族集団のあいだで造り上げられたエスニックジョークは、地理的かつ言語的、文化的に懸け離れた明治時代の日本で取り上げたらいったいどうなるのだろうか。

5.2 『開口笑話』に訳出されたエスニックジョーク

エスニックジョーク、特に他民族を愚かな者もしくは抜け目のない者として描くジョークは、デイビズによると殆ど全ての国に存在し、かなり普遍的な表現である（Davies 383）。日本にも少なくとも江戸時代からあった。例えば 1772 年のジョーク集『高話 鹿の子餅』にある釜山海の唐人（韓国人）をバカにするジョークである（小高 380）。しかし、他の国や民族との交流が限られていたという理由で、江戸時代にエスニックジョークと言えるものは非常に少なかった（Hibbett 165）。明治時代に入るとエスニックユーモアの盛んな西洋からエスニックジョークとそれに不可欠のステレオタイプ像のモデルが流入する。福沢諭吉は、1884 年に出版した一枚刷り風刺画『北京夢枕』に、欧米の諸国が使っていた「時代遅れ、怠け者で阿片常用者の中国人」像と「軍服を着ている軍事的他の列強国」像を取り入れ、自分の政治的な立場を上手く宣伝した（飯沢 1977:

174-185 を参照)。しかし、彼と彼の長男は『開口笑話』を作る時に、遠く離れたアメリカの多民族のステレオタイプにあまり関心はなかったと言える。それは以下のジョークの数の比較から分かる。

『開口笑話』には数にして 351 個の英文ジョーク、そして滑稽談の中には 20 個のエスニックジョークがある。エスニックジョークは全部で 351 個あるジョークの 6%に過ぎず、当時のアメリカの雑誌に比べるとやや低めの率である。20 個のエスニックジョークの内訳は黒人のジョークが 5 つ (98、119、142、269、303) アイリッシュジョークが 3 つ (256、299、304)、ジューイッシュジョークが 7 つ (83、91、133、212、289、359、391)、そして英国人を対象にするジョークが 5 つ (86、95、288、307、382) であるが、その中から訳出されたものはただジューイッシュジョークの一つと英国人のジョークの 4 つだけである。

5.3 黒人のジョークとアイリッシュジョーク

黒人のジョークとアイリッシュジョークは、デイビズがいうよくあるエスニックジョークの種類の一つ、愚か者を笑うジョークに当てはまる。愚かものを笑うこのジョークの対象は歴史的に労働階級の移民である。アメリカで典型的にこのジョークで笑われるのは奴隷として渡った黒人と貧しい労働者として渡ったアイルランド人である。Pat や Murphy、McFinigan などの名前や名字、またはアイリッシュ訛り、例えば、what (何?) は phat になる、I (私) は Oi、you (あなた) は ye、down (下) は doon、smoking (喫煙) は shmokin' になることでのアメリカ人の読者は登場人物がアイルランド人だと分かりステレオタイプを連想する。黒人ジョークの場合、職業は召し使いかウェーターであること、時々名前に Uncle (おじさん) が付くこと、あるいは、話し方、er、or、ir は ah (major=majah、sir=sah)、I は e (if=ef) th は d (there is=dar's) になり、現在形と過去形が混乱するという文法的な間違い (例えば afraid は feared か afeerd になる) で登場人物が黒人であると分かってくる。しかし、福沢一太郎の翻訳では、これらの特徴がなくなり、民族および人種面が消え、単なる日本の小咄の田舎者を笑うジョーク、および狂言によく登場するバカな召使い像に見える。以下の黒人ジョークはその好例である。

GREAT FORESIGHT

Boss – This makes the third day straight that you haven't shined my shoes.

Cuffy – Dar’s no blackin’ de house, sah.

Why didn’t you tell me before?

Bekase I was afeerd you mout buy a box.

せんけん
先見大なり

だんな コラ ― こそうきさま くつ みが
旦那 コラ ― 小僧貴様がおれの靴を磨かないのはこれで三日目だぞ

くつずみ
小僧 靴墨がありませんもの

なぜ早くさう云はなかつたんだ

そ 夫れでもあなたに云ふとあなたがお買ひなさるかも知れないと心配でなり
ませんでしたから

福沢が、黒人訛りを示す間違ったスペルの意味を理解していたかどうかは不明である。しかし、「mout buy」= might buy = 「お買ひになさかもしれない」と訳出できたからには福沢も普通の英語ではないと認識していたと思われるが、黒人のステレオタイプ表象には関心を持たなかったか、もしくは読者にとって意味がないと考え、黒人の召使いを小僧にしたのではないだろうか。これらの訳されていない愚か者および怠け者というステレオタイプ像は、当時のアメリカのワスプ社会の読者にとっては、社会における黒人とアイルランド人の低い位置を正当化するものと思われていた (Davies 390)。

5.4 ジューイッシュジョーク

ジューイッシュジョークの場合も、登場人物の名前や名字 (Isaacs、Goldstein、Hockstein など)、何らかの商売をやっていること、そして、イディッシュ語の訛りがアメリカの読者にはユダヤ人を連想させる。ユダヤ人のイディッシュ語の訛りもスペルで示されている。たとえば、w は v になり (was=vas、will=vill、always=alwavs、water=vater) ほかには my は mein、th は d、have は haf、quarter は gwarter になる。アメリカ人の読者にとってこれは抜け目のない吝嗇家のステレオタイプにつながる。ユダヤ人の比較的高い社会的地位は、ずる賢くかつ不道徳な方法によって手に入れたという印象を助長し、ワスプの生き方を正当化すると思われている (Davies 390)。『開口笑話』の7つのジューイッシュジョークの訳にはユダヤ人を示す名前と訛りが消えている。例えば、ジョーク (212) ではユダヤ人を示す名前 Goldstein は花依団五郎^{はなよりだんごろう}という戯作的名前に変わる。⁹しかし、一つのジョーク (359) だけは英文にはない民族の名前「ジュー」(ユダヤ人)を使ったので、日本の読者の頭の中でユダヤ人と吝嗇の

ステレオタイプ像が繋がった。

“Oh, Fäder, dere vas a holes in mein shoe, gif me a qwarter to haf it mendet.
Der vater runs in like a sieves.”

“Mein son, you should always safe gwarters ven you can. Just cut anoder
holes und der vater vill run out so fasd as it was come in.

ジュー人の子供 あのとおつさんわたしの靴に穴があいたのを直させるから
二十五銭おくれな、丸でざる目を漏る様に水が流れ込でいけないから
父 こらへお前はいつでも出来る時には僥約して金をむだに費はなひ様にし
なければいけませぬ靴に穴があいたらもう一つ別に穴をあけなさいそうす
ると片一方の穴から水が這れば直に片一方の穴から流れ出してしまふわ

福沢は、なぜこのジューイッシュジョークだけにユダヤ人（民族）を示す「ジュー」という言葉を使ったのであろうか。日本にはユダヤ人は殆どいないが、20世紀の日本に、特に20年代から、日本人による反ユダヤ人主義を示す文章が現れたとゴッドマンと宮澤は指摘する（Goodman & Miyazawa）。彼らによると日本人のユダヤ人に対するイメージの多くは明治時代に翻訳された西洋文学からきたものである（29）。福沢一太郎によって訳されたジョークからも少なくとも一つのネガティブなユダヤ人像のモデルが日本に伝わったと考えられる。

5.5 イギリス人のジョーク

上記の黒人、アイルランド人そしてユダヤ人を対象にするジョークとは異なり、イギリス人を対象とする5つのジョークの内、4つがイギリス人とイギリス人のステレオタイプをつなげるものであった。イギリス人のステレオタイプとしては「感情を表にださない」、「気取り屋」などがある。1880年代以降、イギリスの「紳士」、貴族およびパブリックスクール出身の男性はイギリスの支配的な男性性のステレオタイプとなっていた（Giles & Middleton 179）。イギリスの階級制度に反対していたアメリカ人がこのステレオタイプを多少悪化させた。このことは次のジョーク（95）に露骨に見られる。

An Englishman crawled out of the debris of the wreck of two passenger
trains, rubbed his eyes and drawled: “I daw say this will – ah – cawse
another delay, ye know.”

汽車衝突して微塵と為り片々累々たる其中よりソロへ匍出でたる一人
の英人が目をこすりつつ退屈そうに「是れで又おくれた

19世紀末、日本に滞在している外国人の中ではイギリス人が一番大きい存在であった。1885年から1896年にかけて日本にいるイギリス人の数は1200人から1750人に増えた (Hoare 23)、イギリスのダンディー (紳士ステレオタイプの一部) が、明治日本において男性性のモデルとして数多くの上流階級の男性に取り上げられた (Karlin)。つまり、明治時代にイギリス人は、黒人やアイルランド人、ユダヤ人よりも強く意識されたということである。しかし、上の例を含めて、イギリス人として訳されたジョークは英文ではっきり「イギリス人」 (Englishman) と書かれたものだけである。唯一訳されていないジョーク (86) は、イギリスの上流階級のステレオタイプである **Algernon** という名前、独特の話し方 (r は w になる。例えば realize=wealize、trousers=twousers) そして、彼らがファッションに関心を持っていることが含まれている。これらのことは直接、登場人物が「イギリス人」であること示しているが、翻訳では貴公子という訳が使われ、イギリス人とイギリス人のステレオタイプのつながりは見えない。

6. 終わり

これまでに見てきたことから、アメリカのワスプ中心の社会において造り上げられたエスニックジョークとそれに込められているステレオタイプ表象に対する福沢たちの感覚が曖昧だと判断できる。このため福沢たちのステレオタイプ表象の翻訳が中途半端な形で終わるのである。結局、日本の読者には西洋文化の実情は伝わっていなかっただろう。しかし、彼が訳出したユダヤ人やイギリス人が、当時の日本に自己と他者の表象のモデルを提供したと考えるのは妥当であろう。福沢によって訳された西洋のジョーク集『開口笑話』は「日本人」としての意識、つまり、日本人にとっての自己と他者に関する今後の言説の一部となったであろう。

今後の課題として残っているのは教育手段としての福沢の英和对訳ジョーク教育思想を網羅的系譜の中に位置つけることである。そして、この本だけではなく、時事新報や他の明治時代の雑誌新聞に掲載された西洋のジョークは、当時の日本人にとって、どのように変化している他者 (外国人・異文化) 像に繋がっているのかを探求することである。

注

- 1 この論文の『開口笑話』の引用はすべて飯沢匡の『福沢諭吉の「開口笑話」』（1986）からである。慶応大学三田キャンパスの「貴重書室」に所蔵された原本をこの本と比較すると、ジョークの題名の形が統一された面と、文末の広告が無くなった面以外、飯沢の本に載っている文が原本と同じである。但し、私が引用した文にルビは加えていない。そして、数カ所に異なる漢字あるいは仮名を使用する。
- 2 『開口笑話』の発行部数は不明であるが、当時、「時事新報」の発行部数は2万部を上回っていた。
- 3 研究者、飯沢匡（1977、1984、1986）と本論では『開口笑話』を「ジョーク集」と呼ぶが、厳密に言えば全部はジョークではないので、福沢の言い方 **Pleasantries**（滑稽談）の方がふさわしい。
- 4 長島平洋は「本日のジョーク」欄の始まった時期を正しく指摘している。しかし、いつから和訳が付けられるようになったかについては、長島は明治19（1886）年1月2日号から始まったと言っているが、実はその5ヶ月前にはじまっていた。
- 5 実際は当時の見出しは現在の新聞に比べるものにならないほど小さい。見出しのない記事或いは項目は少なくなかった。
- 6 私が数えた63種類と異なり長島平洋は54種類と数えていた（長島20）。しかし、これらは必ずしも、雑誌から直接引用されたジョークではない。なぜならば、雑誌の一つ *Puck* の1890年代のものを見たら、一つの号に別の雑誌や新聞から引用されたジョークが10以上も見られるからである。
- 7 この本やと次の明治後期の英和対訳ジョーク集が国会図書館の近代デジタルライブラリートップページ (<http://kindai.ndl.go.jp/>) で見られる。勝俣銓吉郎『笑話集 英和対訳』（ABC 出版社 1901）、中学英語研究会編『英語一口噺 対訳詳註』（宝文漢 1903）、英語世界社著『滑稽笑話集 英和対訳』（英語世界社 1903）、Eigokokuwa 編『?テル、ミー 英和対訳』（西村寅次郎 1907）の附録「笑話集」。
- 8 “Workers get the word: No to Racial Jokes.” *Daily Herald* (Chicago) March 6, 1987. “Why Do People Find Racist Jokes Funny?” *BBC News*, May 7, 2002 (news.bbc.co.uk/1/hi/uk/1972565.stm)
- 9 一太郎の訳に目立つこのような戯作的な表現は注7の明治後期のジョーク集にはあまり見られない。別の論文では、これらの明治後期の本と『開口笑話』の比較を通して、『開口笑話』が出版された当時の翻訳可能性について論じたい。

参考文献

- 飯沢匡「知られざる福沢諭吉」『武器としての笑い』岩波新書、1977 162—203頁
 --- 「ジョークの鼓吹 - 『開口笑話』の重要性」桂米朝編『笑：日本の名随筆 22』作品社、1984年
 --- （現代語訳）『福沢諭吉の「開口笑話」』富山房、1986年
 エドワード・フックス『ユダヤ人カリカチュア』羽田功訳、柏書房、1993年
 開高健『食卓の笑い』新潮社、1982年

- クリスティ・デイビス、安部剛『エスニックジョーク』講談社選書メチエ、2003年
 小高敏郎（校注）『江戸笑話集』（日本古典文学大系 100）岩波書店、1966年
 『時事新報』（縮刷版）龍溪書房、1982年
 清水勲編『上等ポンチ』（漫画雑誌博物館、明治時代編3）国書刊行会、1986年
 長島平洋「日本のジョーク ―福沢諭吉「開口笑話」と尋常小学国語読本―」『笑い
 研究』7号、日本笑い学会、2000年、19-33頁
 『日本史大辞典』平凡社、1992年
 福沢諭吉閲、福沢一太郎訳『開口笑話』時事新報社、1892
 『团团珍聞』（復刻版）本邦書籍、1981-83年
 『明治人名辞典』日本国書センター、1987年
 Appel, John. "From Shanties to Lace Curtains: The Irish Image in *Puck*." *Comparative Studies in Society and History*. 13:4 (1971): 365-75.
 Curtis, L. Perry (Jr). *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature*. Washington: Smithsonian Inst., 1997.
 Davies, Christie. "Ethnic Jokes, Moral Values and Social Boundaries." *The British Journal of Sociology*. 33:3 (1982) : 383-403
 DeLange, W. *History of Japanese Journalism*, London: Japan Library, 1998.
 Fisher, Roger A. *Them Damn Pictures: Explorations in American Political Cartoon Art*. Connecticut: Archon Books, 1996.
 Giles, Judy & Tim Middleton. *Studying Culture: A Practical Introduction*. Oxford: Blackwell, 1999
 Goodman, D G. and Miyazawa M. *Jews in the Japanese Mind: The History & Uses of a Cultural Stereotype*. Lanham, MD: Lexington Books, 2000
 Harootunian, H.D. "Introduction: A Sense of An Ending and the Problem of Taisho" in Silberman & Harootunian (ed) *Japan in Crisis*. Ann Arbor; University of Michigan, 1999
 Hibbett, Howard. *The Chrysanthemum and the Fish: Japanese Humor Since the Age of the Shoguns*. New York:Kodansha Int., 2002.
 Hoare, J.E. *Japan's Treaty Ports and Foreign Settlements; The Uninvited Guests 1858-1899*. Kent: Japan Library, 1994.
 Karlin, Jason. "The Gender of Nationalism: Competing Masculinities in Meiji Japan." *The Journal of Japanese Studies*. 28:1 (2002): 41-77.
 Leveen, Lois. "Only When I Laugh: Textual Dynamics of Ethnic Humor." *MELUS*. 21:4 (1996): 29-55
 Lowe, John. "Theories of Ethnic Humor: How to Enter, Laughing." *American Quarterly*. 38:3 (1986): 439-460
 Mintz, Lawrence E. "Humor and Ethnic Stereotypes in Vaudeville and Burlesque – Ethnic Humor" *MELUS*. 21:4 (1996) 19-28
 Wells, Marguerite. *Japanese Humour*. New York: Macmillan, 1997.